

令和七年度入学試験問題（前期日程）

小 論 文

中等教育教員養成課程 中等教育プログラム 書道専攻

注意事項

- 一 時間は六十分です。
- 二 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に記入してください。
- 三 解答紙には、必ず受験番号を記入してください。

令和 7 年度一般選抜（前期日程）入学試験問題

補足説明

中等教育教員養成課程 中等教育プログラム 書道専攻

◎科目名 小論文

〔1〕 1 ページ 8 行目 補足説明

「前述」 の内容



筆毛のはたらきの状態に応じながら筆管を自在に傾け、そのはたらきを助長すること

〔一〕 次の文を読んで、後の問いに答えてください。

書の線には太さがあります。一文字の中に細太の変化があらわれ、また太いタイプの書があれば、細いタイプの書もあります。（中略）

線の細太は、筆の使いこなしによってつくられます。筆にはそれぞれに太さがあり、長さがあります。長いものを長鋒（鋒は筆毛の意味）、中くらいのものを中鋒、短いものを短鋒とよんでいます。鋒が長くても短くても、筆毛をはたらかせて書くことに変わりはありません。ただし、長鋒は毛が長いのでしなる部分が多く、そのために腕しだいが多様な筆づかいができ、短鋒はそれが短い反面、筆先のはたらきが手指によく感じられ、安定した運筆ができます。

さらには、筆先の開き閉じも、運筆上の重要な機能になります。（中略）図1は宮島詠士（一八六七―一九四三）が六〇歳のころに書いた作品です。詠士は前述したような、手首、ひじを柔らかに動かして筆管を傾けるようなことをせず、起筆を運筆方向の逆から打ちこむ逆入の徹底と、筆管を微妙に回すことによって筆先が開閉する極意を得て、筆管を立て、筆先の開閉だけで強く歯切れのいい、みごとな線を引いた特異の書家でした。

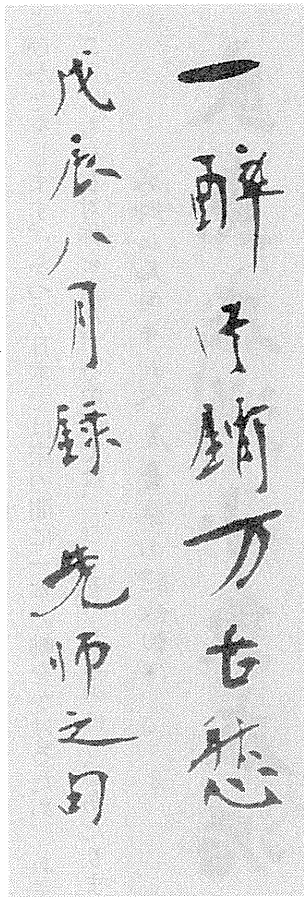


図1

また、北宋の第八代皇帝徽宗（一〇八二―一一三五）も、〔A〕を守って筆先を閉じ、筆毛を弓なりにきかせて、細く澄みきった線を生みだしたことで知られます。（中略）詠士や徽宗のように筆先だけを使い、筆毛の側面をいっさいあてずに

書くなどというのは、むしろ特殊の例です。（中略）

図2は清代の末期に活躍した趙之謙（一八二九～八四）の作品です。「良魚在淵、小魚在渚」と「土治曰平、水治曰清」の二幅の軸に書き分けられた作品で、二幅とも四言二句の対句を整然と書いています。この書式を中国では、対聯（つうれん）というよびかたをします。ふつう日本では床の間に一本の軸をかけるため、あまり見かけない様式ですが、軸を壁面につけ、なにごとも左右対称を重んずる中国では、むしろこちらのほうがあたりまえの形です。

文卿仁兄同年大人属書集毛詩故訓傳

良魚在淵 小魚在渚

図2

土治曰平 水治曰清

同治戊辰十二月弟趙之謙

この作品は字形も変わっていますが、横画、縦画のいずれもがきわめて太く書かれていて特徴的です。横画などは、画と画とがくつつくぎりぎりの太さで、これでもかと画と画のあいだを攻めこんでいる感じを与えます。このような太さは、筆先だけのはたらきでは、とても表現しきれるものではありません。筆をかなり根元から使い、いわば腰をひねるように、筆先をねばつくくたわませて書いたものと思われる。とうぜんながら【B】も線にあらわれており、それが線質に豊かさ（と厚み）を加えています。では、①なぜ趙之謙はこのような癖の強い、特徴的な文字造形を発案し、書いたのでしょうか。趙之謙が書作に没頭したころ、中国では右に刻した文字の書風に、強い関心が集まっていました。それも、②とくに北

魏時代の楷書が注目の中心になっていました。(以下略)

※出典：『書を楽しもう』 魚住和晃著 岩波ジュニア新書 岩波書店 一〇八ページ～一二三ページ

※出題の都合上、文章を一部改変しています。

(問) 文中の【A】及び【B】には、用筆法を表す用語が入ります。それらの用語を使用しながら、また、②のサイドラインに示す古典例を挙げながら、①のサイドラインの問いについて、その用筆の工夫を、四百字以内で答えてください。

〔二〕 (問一) 書道史上の「三筆」「三跡」の用語に示す人物について、それぞれ三名を挙げてください。

(問二) 「三筆」「三跡」それぞれの中から、あなたが関心を寄せている人物一人ずつについて、その代表的な古典について、その書の特徴を、書を構成する要素の観点から述べ、さらに、あなたが感じている印象を二百字以内で述べてください。